

# ハンドサッカーにおけるシュート方法の分析

特別支援教育におけるスポーツ活動

○金森克浩

(日本福祉大学)

KEY WORDS: 特別支援教育・スポーツ・ハンドサッカー

## 1. はじめに

2020年のオリンピック、パラリンピックに向け、障害者スポーツが盛んになってきている。全国の特別支援学校においても、様々な競技スポーツを特別支援学校の中で指導が行われている。その中で、パラリンピック競技には採用されていないが、東京の肢体不自由特別支援学校を中心として普及が進んでいるハンドサッカーに焦点を当て、独特なその競技方法から、ともに学ぶスポーツとしてのあり方を検討した。

## 2. ハンドサッカーとは

ハンドサッカーとは1980年頃、東京都立府中養護学校において、体育の授業に肢体不自由のある生徒が楽しめる競技として考案されたものである。名称にあるように、サッカーの要素やハンドボールの要素などを組み合わせながら身体の動きに制限のある生徒でも参加できるように工夫されたスポーツである。

競技規則の序章には「ハンドサッカーとは、既存の競技では十分に対応しきれない様々な実態の障害をもつ子ども達に合わせ、活躍の場を広げ、個々の能力を引き出し、心身を健全に育成するために考え出された競技である。ハンドサッカーのプレイヤーおよび指導にあたる者はこの根本に流れる精神を大切に、競技・指導に努める。」と述べられている。

そのため、様々なポジションがあり、障害の重い児童生徒から立って歩くことが可能な児童生徒まで、同じ場で競技をすることが可能となっている。特に特徴的なのはシュートで、メインゴールに直接ボールを入れるシュートのほかに、スペシャルシューターとポイントゲッターという独特のポジションがあり、この選手が行うシュートでは確率が1/2にするというほかは、どのような方法でシュート行うかは各学校の担当者に任されている。

本論文では、このシュート方法に注目して分析を行う。

## 3. シュート分析

前項で書いたように多様なシュート方法では、手で投げ他に足で蹴るといった身体だけを使う方法のみならず、滑り台などポッチャ競技のランプを使う方法もある。また、より障害が重度の児童生徒のための支援機器であるスイッチなどを使って独自の投てき装置を利用するなどその方法は様々なである。

社会福祉法人日本肢体不自由児協会が「重度障害児社会参加促進スポーツ支援者研修事業」で作成したDVDに掲載されている、シュート集にはスペシャルシューター29事例、ポイントゲッター25事例の計54事例に対して分析を行った。

本論文では、これらを以下の5つに分類した。

- (1) 機器を使わずに手でシュートする
- (2) 機器を使わずに足でシュートする
- (3) ランプ等を使ってボールをシュートする
- (4) 支援機器等を使ってシュートする

- (5) その他

## 4. 結果

スペシャルシューター、ポイントゲッターに分けて整理したところ表1のようになった。

	スペシャルシューター	ポイントゲッター
機器を使わずに手でシュートする	24	5
機器を使わずに足でシュートする	1	2
ランプ等を使ってボールをシュートする	3	13
支援機器等を使ってシュートする	0	4
その他	1	1
計	29	25

比較的障害の重い選手が参加するポイントゲッターの方が、器具を使って競技をしている率が68.0%と高く、逆にスペシャルシューターは全体の82.8%が手でボールを操作していた。

また、その他に分類したものは、スペシャルシューターでは「電動車椅子を操作して台に乗ったボールを押す」であり、ポイントゲッターでは、「バッテリーカーをスイッチで動かして前進してボールを転がす」であった。

## 5. まとめ

ここで分析した事例は、あくまで肢体不自由児協会が撮影した事例となるため、実際にはこの分類とは異なるが、多くの学校では、スペシャルシューターが手でシュートをしている。これは、定位置にいて、ボールを受ければすぐにシュート権が与えられるポイントゲッターとは違い、フィールドプレイヤーと同じくフィールドの中において、ボールを受け、スペシャルシューターの領域に入ってシュートの権利が与えられるので、自分で動ける選手をスペシャルシューターにしていることだと考えられる。手でシュートしない選手でも、足または電動車いすを操作するということは、自力での移動が可能な選手が選ばれるからだろう。

逆に、ポイントゲッターについては、ドリブルしてシュートをする生徒から、スイッチ等の支援機器を使う選手までとシュートの仕方は幅広い。これは、比較的疾患の幅が広い特別支援学校の場合、フィールドプレイヤーと同じように、立って歩く事が可能な、内部疾患のある生徒も在籍するが、健康上の問題もあり、動き回る事に制限があるため、ポイントゲッターになる生徒もいるためではないかと考えられる。

今後はメンバーの決定要件などについて、実際に学校現場のヒアリングを行い、分析をすすめたい。

(KANAMORI Katsuhiko)